

オオムギ黄枯病ならびに縞萎縮病に対する数種薬剤
および石灰窒素施用による防除

楠幹生・三浦靖・十河和博・都崎芳久*

オオムギ黄枯病および縞萎縮病の常発ほ場に、メタラキシル剤、エクロメゾール剤、TPN剤、トリクラミド剤、クロルピクリン剤および石灰窒素を土壌処理し、オオムギ「サヌキハダカ」を播種して根部の褐変程度と葉の黄化症状の程度および縞萎縮病によるモザイク程度を経時的に調べ、両病害に対する防除効果について検討した。得られた結果は以下のとおりである。

1. メタラキシル剤 20kg/10a 全面処理、同 10kg/10a 播溝処理およびクロルピクリン剤 50kg/10a 処理は根部の褐変程度を著しく低く抑え、これらの処理を行った土壌からは *Pythium* 属菌がほとんど分離されなかった。したがって、これらの処理法は黄枯病に対して有効であると考えられた。
2. TPN 剤 30 kg/10a 全面処理およびクロルピクリン 50 kg/10a 処理は、縞萎縮病の発病を遅延させ、縞萎縮病によるモザイクの程度も低く抑えたため、縞萎縮病に対して有効であると考えられた。トリクラミド 40 kg/10a 全面処理も縞萎縮病によるモザイクの程度を低く抑えたが、発芽率を低下させるため、実用性はないと考えられた。
3. 石灰窒素 50~90 kg/10a 処理は根部の褐変程度および縞萎縮病によるモザイク程度が無処理に比べて差がなかったが、処理量を増やすと収量は増加した。

キーワード:オオムギ、黄枯病、殺菌剤、縞萎縮病、石灰窒素